

幼稚園についてからの一時間

子どもを帰してからの一時間

山田久子

幼稚園の庭が見えると、自然に足の早まるのを感じる。「あ！ 先生だ」。靴音を聞きつけて、待ちかまえていた子どもがとんで来る。「先生おはようございります。僕、一番。私は、二番。H君も、

もう來てるの。先生は遅いなあ」。O君の手が私の腕をぐいぐいとひっぱって行く。子どものぎわめきをよそに、私は、ふと考えた。ふしぎな事である。日頃そんなに早く登園しない子どもなのに……。H君は、なぜこんなに早いのだろうか。急ぎ足に職員室の前に来た。入口に立っているH君に思わずことばをかける。「あら、おはよう。今日は早いのね」。「僕、お当番だもん。六時半に起きちゃった。火曜日だからお弁当でしょう」。「そうでしたね。しっかりお願いしますよ」。お花の水換え、机づき、お盆配り、先生のお手伝いをすることがそんなにうれしかったのだろうか。胸につけたお当番の印を、しきりにさわっていられる。幼心に一日の責任を感じているのだろう。たいへんなはりきりようである。

窓を開き、黒板に日付を入れ、室を整えているうちにぞくぞく園児が登園して来る。朝の挨拶。元気な顔、声。子どもたちの表情をひとりひとりみつめると、そのどもの心身の状態が解せるような気がする。反射的に子どもたちも私の心の状態を敏感によみとる。雨上りのすがすがしい朝。木々に包まれた庭は、新緑でまぶしい。「お天気の良い日はお日様にあたります」。子どもたちに、こう呼びかける。さあ、「これから朝のお遊びが始まるのだ。その前に手洗い、うがいが上手にすますか？」。私はさりげないふうをしてながら氣を配る。ほとんどの子どもが庭に出て遊び、気持のよい朝の空氣を胸いっぱいに吸い込む。あちらこちらに小さな身体が跳びはね、それ自分たちの好きな遊びを展開していく。他の組の友だちと、どのクラスで遊ぼうと自由だ。それだけに友だちはも広範囲になり、どこへ行つてもおたがいに親しみることが出来る。年少組も年長組も、仲良く、いたわり合つて楽しい雰囲気を作り出すようにと、私たちは細心の心づかいをする。保育室、遊戲室、庭と、いたるところで興味中心の遊びがなされ、皆、なかなか活発である。急に「先生！」と頭上から声がかかる。N君が登棒のてっぺんで手を振っている。同場の棒の下では、四人の女兒が登ろうと、靴下を脱ぎ、手に唾を

つけて一生懸命である。“飛びついては落ち、飛びついては落ち”小さな手が、赤くなっている。それでもやめずにむちゅうだ。「もつと手を伸ばして、足を鉄棒から離さないでよく曲げましょう。こわくはありませんよ、大丈夫しつかりね」私も下から応援してあげる。庭のすみで、年少・年長組が仲良く花壇に水をやっている。そのかたわらを年少組の汽車が縦横に走り廻り、木製の信号機を操作する。年長組の踏切番も大わらわである。右の方に目を移すと、茶目のM君が、泣いている年下の女兒のかたわらで何かしているらしい。また、いつものようにおいたをしているのかしらと案じていたら、なんと思ひがけないことには、M君が、転んだK子ちゃんを一生懸命いたわっているのだ。「もう、泣かないのよ」膝の砂を払いながら、何度も何度も優しく慰めている姿は、さながら兄妹のようだ。M君にもこんなに優しい愛情の深さがあるのかと自分の先入観に恥じ入ってしまった。庭を一周して遊戯室を見ると、ステージの上から「先生レコードかけてちょう

だい。ほらラーラ、ラ……あの曲よ」。「あ！ これでしよう、動物の行進ね」。「そう、どうも有難う」。につこりとうなずく。蝶になり、花になり、自由表現が始まつた。高い所で踊ることは、子どもたちの得意感を一層満足させるようだ。曲に合わせて思うままに踊る楽しさ。傍観していく私も年少組の子どもたちも、次々とこのリズムにとけこんでしまつた。……と突然、突拍子もない大声に、はつとした。たしかに遊戯室のステージあたりで叫んでいる。「やめろ！ 人がせつかく造つたのに」。どうやらいざこざがおきている様子。そつと陰に廻る。子どもが数人。その真ん中にS君がいる。ごく自然に、私は子どもたちのそばに近よつた。無関心をよそおつて事の成行きを見守つてみる。原因は、S君の使いたいと思つている積木が、すでに友だちに使われてしまつたことから、らしい。グルーブで作つた潜水艦が、S君の暴力で、こわされてしまつたというのだ。無断でやつたおこないは許しがたい。子どもに笑聲で答える。U君が「ねえー先生ライオ

がいどうして裁が始まつた。「君貸してつて言えば、いいじゃないか……そしたら貸すよ」とT君が提案する。横から「そうだね」と皆が口々に同意した。S君はなかなか謝らない。しばらく興奮した顔で考えこんでいる。沈黙……そのうちに、決心したのだろう。「君、ごめんな」。あどけない顔で、心から悪かつたと、頭を下げて謝つているのだ。「いいよ、Sちゃん入れよ」、ひとりが言うと、皆も口を揃えて「いいよ、入れよ」と、もう完全な仲直りだ。ほんの数分の出来事だが、なんと素直なほほえましい風景だらう。保育室をのぞくと、組木の自動車が間もなく発車するところだ。「シユノ、シユボ、シユボ」仕草のかわいいこと、十本の指が大活躍だ。まるで自分が機関車のつもりなのだろう。一方では描画、絵合わせにむちゅうだ。オルガンを弾いている子どもも、私が室に入つて来たのも知らず弾き続いている。「先生、ちょっと来て」。部屋の片隅で絵本をみている数人の子どもたちに呼ばれた。「なんですか」と

ンのお父さんの頭の上にある、もじやもじやの毛は、どうしてあるの？」という質問である。その真剣な顔といったらこつけいなくらい。「あら、H君、おもしろいことを考えたのね。あれは、きっと動物の王様らしく、立派に見せる為にあるのでしよう。ライオンのお母さんは優しく、お父さんはお父さんらしく敵がやって来ても強そうに見えなければならないから、ではないかしら、そうそうそれに、H君だって、髪があさふさしているでしょう。……ライオンも頭が大事なんでしょうね」U君はこづくくりをしてみた。また、絵本を見続け、次の頁に指が触れる。絵本から生まれた質問が終ったかと思うと、矢継ぎ早にまた、質問が出てくる。「先生、お母さんの、お母さんの……ずっと前は誰から生まれたの。」「神様って、どこに住んでいるの」沂頃は、「どうして？」どうして？」の質問をめでてある。時には、未知の問題として考え方を持続させるようにしている。はつきりと断定的に返答してよかつたのかしら、と責任を感じることもしばしばだ。知識欲の旺盛な

大切な時期にこそ、正しい方向に導いていかなければならぬ、とつくづく教育の難しさを痛感させられる。また外でにぎやかな声が聞こえてきた。「先生、たいへん、早く、早く!」誰だろうか、けがかしらととんで行く。男児が四人、地べたに体をぴったり伏せて、「先生、早く、早く!」の連発なのだ。「一体どうしたの?」「先生、てんとう虫早く観ないと逃げちゃう」「あらー、珍しい、どれどれどこに、かわいいこと、どこで捕えたの、おへやに連れて行って飼いましょう!」「そうね、それがいい。皆大よろこびだ。早速、へやに持つて行く。

「てんとう虫は、葉っぱが好きでしょうな!」「先生、明日、僕が朝早く葉っぱを取ってんとう虫ぐるま(紙で製作した)僕、ボタンを二〇〇も描いたら、いやだながれてしまった。T君が「先生、この間のうちまち保育室の話題は、てんとう虫に注がれてしまった。」「あー、私も」「僕、色も違っちゃった。」そこにそんな声が聞こえる。本当に

「正直な子どもたち。「でもよく気がつきましたね」「帰つたら、もう一度作ろう」。実物をみたら、そんな意欲も出てくるのだろうか、製作きらいなH君も同調者のひとりなのだ。私は何だかうれしくなってしまう。ささやかながら、子どもが成長していくよろこび、今、それを味わったと思う。自由な遊びの中にも、楽しみながら学びるということは、非常に貴重であり、有意義なことなのだ。経験から自然に知識を吸収していくその時間の間、私たちは、それこそ、子どもの一挙一動に神経を駆使する。にぎやかだった保育室も子どもたちの去った後は、しんと静まり返る。室を整え、子どもの落し物、クラスの持物を調べる。出席簿の整理、集金帳、雑記帳、保育を中心とした先生がたとの話し合い、まだまだ明日の準備も控えている忙しさだ。今までの緊張がゆるむと、ひとしお疲労感を感じる。また明日、あの子どもたちの笑顔を思ふ時、私たちは「疲れを忘れ、また新しい元気と生きがいを感じるのである。